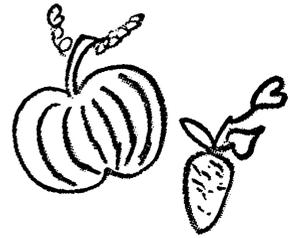


広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	1・2・3年生における連想の発達（その一）
Author(s)	松原, 俊一
Citation	児童の言語生態研究, 1 : 14 - 18
Issue Date	1968-05-05
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045019
Right	
Relation	





松原俊一

われわれのいま、もっとも知りた
いことは児童における連想概念のバ
ターンがいかに分化し、それがいか
に発展しているかということであ
る。幾つかのタイプが想定され、そ
れぞれにさまざまな様相を感じ、わ
れわれに印象づけられ、かつ、われ
われがそれをどこまで意識化してい
るか、そしてその年令的階梯はどこ
か、この姿なき正体をつきとめたい
野望にかりたてられたのである。

国立国語研究所編『分類語彙表』
によれば「接続」の項において、いわ
ゆる「接続語」が八十五語収められ
ており、更にそれぞれの語は八つの
分類項目によって整理されている。

ただし、この分類項目も、同書ま
えがきのことわっているように、
「その分類と各項目の排列とにつ
いては、原理的に述べることが至極
困難である。」

「かような分類項目は、実に分類排
列の原理が確立されていないままに
なされたものであり、」

「一つの項目に収めたのは、同義類
義の語の群であって、自由連想によ
る語群ではない。」

「ここではむしろ、一つの意味が生
活場面に応じてどのような語として
現われるかに関心があって、自由連

理由	転換	補充	回帰	選択	反対	展開	累加
なんとなれば、なぜならば、 だつて	そも、そもそも、さて、さて も、とこで……など七語	なお、ただ、ただし、もつと も、ちなみに	すなわち、つまり、たとえば ……など九語	あるいは、または、もしくは それとも	しかし、けれども、だが、そ れでも、さりとて……など二 十一語	まして、いわんや、それゆえ、 では、じゃあ……など三十一 語	および、ならびに、かつ、ま た、それから、しかも、ひい て……など二十四語

想をことさら極力避けようとした。
項目間の排列はいわば連想的なもの
であり、項目内の語の排列も、生活場
面による自由連想を全排除したとは
言い切れないが、趣旨として上の通
りである。たとえば「ビールVにつ
いては、飲酒行動に関連して、
スタウト・ウイスキー・飲む・酔う・
一杯・あわ・ジョッキ・コップ・ほろに
が・ホップ・赤ら顔・ビヤホール」
等々が連想されるであろう。しかし、
この一群の語は、 \wedge 飲むVや \wedge コッ
プVにとっては必ずしも同等の重要

さを持つとは言えない。それにはそ
れの連想語群がある。連想語群をと
らえることも語彙論上の大切な仕事
であると思われるが、ここでは、 \wedge ビ
ールVをただ \wedge 酒・ウイスキー・ス
タウト \wedge とグループをなすものとし
て扱い、 \wedge 飲む \wedge や \wedge ビヤホール \wedge
との関係を断つたのである。」

と、その分類排列の原理を透かし
見ることに困難さを纏述している。
したがって、いわゆる接続語の八つ
の同義類義の分類であって、この八
項目を、直ちに連想の八つのバター
ンとすることはできない。しかし、
われわれが連想を意識することがで
きる概念と、これら八項目を括る「接
続」に向けられた概念とはどれほど
のへだたりと異なりを持つている
か、私には確かめることができない。
「ここではむしろ、一つの意味が生
活場面に応じて、どのような語として
現われるかに関心があって」という
この一つの意味としての「接続」なら
ば、これを人間概念の形式として括
っているとも言える。その小項目と
してのおのおのが、その項目内の語
の働きとしての名称であるのも、他
の「体用・相の類」のそれぞれでな
された分類とは異なっている。そこ
での分類は確かに同義類義の語の群

における

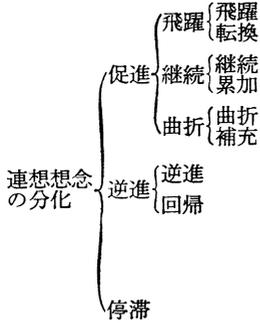
連想の発達 (その一)

に、その最も代表的な語を取り出し見出し項目としているが、「接続」の類においては語群の中から八語を選んではない。だがやはり八項目内の語は同義類義によってまとめられていと言ったとしても、その見出し項目は、項目内の語の働きを義(意味)としているというべきである。ではこの語の働きとは何か。それは、体・用・相の類の語が持つ働きとは別であって、心意(文意)においてのみ感じられる働きである。累加・展開・反対・選択・補充・転換これらもみな心意としてのそれではなければならないのだが、譬喩性が感じられて、想念の形式というのを拒む何かがあるが、回帰・理由などいうのは、それほどでない。しかし、回帰などいうのはやっぱり譬喩によってあらわしているのである。しかし、回帰という項目内の語を見て、この項目名が最もすばらしく感じられるのはなぜであろう。それは譬喩的に回帰という印象を、項目内の語に見いだそうとするからであり、「その通りであった」という回帰感を得てその考察が終わるからである。理由という項目は、「ことわり」とでもすべきであろうと思う。

連想、想念の形式をことばでもつ

て押えようとすることは、上述のように問題がある。あるいは連想・想念に形式があるように思うのは、われわれがことばを持っているからかもしれない。だから、その項目名称には異論の出るの承知のうえのこととしなければならない。しかし、八分類できたことは認めなければならない。八つという数の決定は今後なことであるとしても、区別される「接続」的想念を本稿で参酌したいということである。

そこでわれわれは、まず、先の分類語彙表の「接続」の八項目をあらためて人間の意識の流れの中に置き替えることによって、新たに連想想念のパターンを想定してみたのである。



問題は数限りなくある。たとえば飛躍・転換・継続・累加・曲折・補充・回帰の八パターンを並列的に並べたのであるがはたしてこれらは、このように図式化される性質のものかどうか。また停滯というところえ方

も、意識の停滯はありうるのかどうか、大いに疑問も生じる。したがってこの表はどこまでもわれわれの心覚えとして作成したのであって、子供たちの実感をとらえたのちに、これらの表への帰納と修正と考察を加えていきたいと考えるのである。

一・二・三年生における連想想念の発達

児童において、彼らがその段階でもっともよく行なう連想は、いったいかなるタイプのものであるのか。

この問題についての考察を進めるために、われわれは児童に次の例文を提示し、それぞれについて自由に文章を続けて書かせてみた。

- 1 空には星が輝いている……
- 2 電気が消えた……
- 3 さとうは甘い……
- 4 行こうかしら……
- 5 体がひえた……

(a) 分類に当たっての観点

さて、われわれは児童それぞれに自由な立場で各例文に対して書けるだけのつなぎ文を書かせたが、その結果一例文に対して一文の場合、あるいはさらに多くの文を書き記した

えた——テレビが見られない。前後の想念の關係存在がちがうと思う。飛躍においては、後の想念が完全に前者を蔽っている。転換では前後二者の相互關係が後の想念に至って生きている。ところが、三年に至って転換が一位に上昇するや、飛躍もともに二位食い込み、今まで一位を確保していた継続的順連想は三位に蹴落とされている。これはおそらく転換が飛躍をひき上げたのではなくて飛躍が転換を押し上げたと見るがどうであらう。すなわち、本来子どもにあつては自分のイメージで物を見ているからには、空には星が輝いているという客観的見方よりも、ダイヤモンドとする見方が本来的で、そのことは、三年生になつて強まるということではあるまい。しかし作文の結果からは、この連想が一年生の時は一・六%、二年で一〇・四%と止まるのはなぜであらう。文字を読むという客観的作業が自分のイメージを阻止している段階があり、三年生頃になつて解放され、もとの姿をとりもどすということかもしれない。

(3) 曲折的連想

以上のように、「継続→転換→飛躍」へと発展して来た児童の意識は、四番目に曲折を据えている（表の上

で）が、連想を飛躍させ、それは先の考察によれば、より本来的な自己を取りもどした子どもも、同時に迷いを感じ始めるものなのかどうか。曲折とは先にも述べたように何らかの問い提示を受けて別な意識へと転換していくものとして把えたが、それは三年生では九・三%、二年生では六・四%、一年生では微々たるものでしかない。

(4) 回帰、逆転、逆進、補充連想

「飛躍」「曲折」の他に上昇するパターンは「回帰」「逆転」「逆進」「補充」である。これをもし、いま述べた「曲折」の想念あたりからの迷いの結果分化しているのだと見ると面白いと思うが、勝手な想像に過ぎない。

(5) 累加的連想

「累加」については、以上述べてきたような首尾一貫性は見当たらないが、当初の予想では「継続」と「累加」は同程度の数値でその傾向が現われるものと考えていたが、実際の結果ではそうではなかった。「継続」と「累加」の区別がわれわれにおいて完全におさえられていなかったことにも一つの原因はあつたが今一つの要因として考えられるものに、「継続」という想念の踏まえ方があつた。

はたして「継続」の「継続」、すな

わち「純粹継続」という想念が人間において在り得ることであるのか。つまり、連想そのものは厳密な意味で考えれば、「継続」そのものでありそれ以外の何物でもない。そしてその上に、「継続」の「継続」というものが存在するかどうか。この点に關してわれわれは、幾つもの文例をあげて考察を加えてきたのであるが、所詮理解されないままであつた。

けれども、かと言ってわれわれはそれを否定するわけにはいかなかった。というのは児童が書き記した文例の中に空には星が輝いている——きれいだなあ、空さとうは甘い——なめよう、空行こうかしら——行こうこのような文例が子どもたちから数多く示されてきたからである。それはあくまでも意識がと切れなく流れているものである。だからそれは転換でもなければ飛躍でもない。まして他のパターンであるはずもない。さすれば、意識の流れとしての「継続」を認めざるを得なくなつたのである。

では「累加」とはいかなるものであるのか。われわれは再び「継続」の中に挿入した文例を改めて検討しなおし、その結果、空には星が輝いている——月も輝いている、空でん

きがきえた——テレビもラジオもきえた、空さとうはあまい——おかしもあまい、などの文例をとり出すことができたのである。そして、その集積が、グラフにおけるまとめなのである。けれども、それは空さとう……のタイプのみの「累加」を取り上げ、その他の継続的意識の流れの中にも「累加」と称するタイプが存在しているのではないかと迷つたりもした。また、「継続」と「累加」とは同一パターンにした方がいいのではないか。そんな疑問が消えているわけではない。その点「累加」の表は資料とするには不本意なのである。

(6) 停滞的連想

これには触れないつもりであつたが、子どもたちの文例において次のようなものが表われてきたことを参考までに掲げておきたい。空には星がかがやいている——星がかがやいている、空さとうは甘い——あまい、空でんきがきえた——でんきでんきでんき。これらすべてはこの限りでは前想念より進んだ意識は流れてはおらず、いわゆる連想と呼んでよいかどうかと思われる。つまりくり返しも連想の中を含めるか否かということである。（未完）